

「無題」

椎田 友康

私は農民でも漁師でもないがいつもお天気を気にしている
もちろん雨の日は天気が悪いというわけではない
雨や雪が悪天候というのは理不尽な話だ
雨も雪も私たちに必要なことは明らかである
しかし、カラリと晴れ渡って風の穏やかな陽気はやはり心が軽くなる
そんな日は私の紙飛行機の出番だ

ひと通り飛ばし終わって
木陰で一休みする
そよ風が肌に心地よい
幸福なひととき
だが藤のバスケットに眠る
みどりごの無心の笑顔に
ふと虫のしらせがするときもある
どこからか名も知れぬ花の香りがし
子供たちのはしゃぐ声もする
公園の広い芝生の
紙飛行機も飛ばふありふれた日常の
青空の奥にも
当たり前のことだが
音なく静かに
「吊鐘は鳴り渡っているのだ」と